

(書式1)【候補者用】

① 立候補者の 姓名と所属	村上道夫 福島県立医科大学医学部健康リスクコミュニケーション学講座
② 立候補の理由と 抱負 (400 字程度)	リスク学は、人と社会が持つ価値観を向き合う学問だと私は考えています。頻発する災害、少子高齢化、高度化する科学技術と目まぐるしく変わる社会の中で、リスク学が持つ役割はますます重要になっています。私が日本リスク学会の中で、貢献したいと願っているのは主に以下の3点です。1点目は、学際性・俯瞰性の更なる発展です。日本リスク学会は、これまでも高い学際性を持ち、様々な学問のハブ機能を持っていましたが、前述のような社会の変化とリスクの多様化の中で、個々の学術の深化と俯瞰性の発展はますます期待されるものと思います。2点目は、社会との協働に関する学術的評価を高めることです。調査やデータの分析だけでなく、そこに至るまでの多様な人々との対話、得られた結果に関する社会との共有や協働もまた、学術的に評価され、蓄積されるべきと考えています。3点目は、日本リスク学会の知を広く、社会と共有することです。2019年に発刊された「リスク学事典」は大きな意義がありました。リスク学に関する知をさらに多くの市民とともに共有し、発展することができればと願っています。
② 本学会におけ る 活動歴	<ul style="list-style-type: none"> ・2018年度第31回日本リスク研究学会年次大会にて、実行委員長を務めた。本大会では、多数の参加者が集まったことに加え、大会の特集論文も複数号にわたって掲載された。 ・日本リスク研究学会レギュラトリーサイエンスタスクグループ (TG) にて、第1期 (2014年～2016年) の主要メンバー、第2期 (2017年～2019年) の共同代表を務めた。第3期でも引き続きレギュラトリーサイエンス TG の共同代表を務める。また、発起人として次期リスク学事典に関する TG を立ち上げる他、原子力災害の防護方策決定の正当化に関する検討 TG でも主要メンバーとして活動する。 ・年次大会企画セッションのオーガナイザーとして、「知ってるようで知らない!? ～基準値の根拠を探る2～ (2014年度)」「リスク管理の歴史学 (2015年度)」「身近で見過ごされてきたリスク2 (2016年度)」「日本水環境学会共同企画セッション：水系感染リスク研究の最先端 (2017年度)」「価値と規範からリスク研究の深化と更新を問う (2019年度)」を企画、開催した。 ・日本リスク研究学会誌には、筆頭著者・共著者として9報 (総説、短報、書評、巻頭言含む) 掲載された。 ・「リスク学事典」では第一部第1章[1-5]を執筆した (平井祐介氏との共著)。 ・日本リスク研究学会「2017年度奨励賞」を受賞した。
④ 研究歴・職歴等 (100 字以内)	東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻博士課程修了、工学 (博士)。科学技術振興機構研究員、東京大学リサーチフェロー、特任助教、特任講師を経て、2015年1月より現職 (福島県立医科大学准教授)。

(書式2)【推薦者用】

① 推薦する候補者名	村上 道夫氏
② 推薦者の姓名と所属	藤井 健吉 花王株式会社 安全性科学研究所
③ 推薦理由 (400字程度)	<p>村上氏は、都市工学、水環境、基準値、放射線不安、メンタルヘルスと意思決定、原子力災害の各分野で、驚異的な研究業績を挙げており、査読論文数は120報を超える。当学会レギュラトリーサイエンス TG の中心メンバーの一人であり、「基準値のからくり - 安全はこうして数字になった - (講談社ブルーバックス, 2014)」を筆頭著者として世に問うなど、リスクと社会規範に鋭い視座をもつ国内有数の研究者である。</p> <p>福島原発事故以降、特に原子力災害に関連した健康リスクを中心に研究を進め、食品中の放射性物質リスク評価、放射線と避難のリスク比較研究、専門家-住民リスクコミュニケーションの事例研究など、社会課題に資する研究を切り拓いた。学術としてのリスク学が社会と協働することの必要性を問い、一般市民向けの書籍や講演、国際会議での提言も多い。</p> <p>同氏が本学会の2018年度年次大会(福島)の実行委員長として大会を成功に導いた際には、高い実務能力と先鋭的リーダーシップを示した。今後、日本リスク学会の社会との協働を、学術発信と社会発信の両面から支える中心的人財として、村上氏を当学会理事候補に強く推薦する。</p>